

釈迦牟尼仏、是れ即心是仏なり

『正法眼蔵』「即心是仏」

標題の言葉は、道元禪師どうげんぜんじが著された『正法眼蔵』しょうぼうげんぞう「即心是仏」そくしんぜふつの巻の一句です。

文字通りに訳せば、「釈迦牟尼仏とは、この私たちの心そのものが釈迦牟尼仏である」という意味になります。この心そのまま釈迦さまなら、修行や悟りは必要ないではないか、と思われるかも知れません。しかし、道元禪師は、同じ文章の中で、「その心は私たちの身心による仏道修行を通して初めて釈迦牟尼仏として顕れる」とも述べているのです。

私たちの信仰は、時として、自分の都合でご利益を求める「困った時の神頼み」的なものになることがあります。もちろんそうした信仰の形も、人間の素朴な心の動きとして否定すべきではありません。しかし、自らの努力や心のありようを考えず、他所に心の安定を求めるだけでは、現実離れた妄想を助長させるだけで、本当の宗教的な安心は得られないのです。

お釈迦様は「自からを灯明とし、自らをよりどころとして他に頼ることなく、真理（法）を灯明とし、真理をよりどころとし、他に頼るな」と説かれました。自分をよりどころとして、他に求めず仏法に随って生きよ、というのです。

お釈迦様は、この世のすべての存在は、無常むじょう（絶えず変化していること）である、とお悟りになりました。そして我々人間が苦しむのは、実体として不変なものはないというこの無常の道理に眼をそむけ、物事や自分自身に対して執着する心、すなわち「無明」があるからだと言われました。

道元禪師は、仏としての実践の方向として、発心ほつしん（志を発てること）、修行しゆぎょう（執着を抑え行ずること）、菩提ぼだい（迷いを断ち切る智慧をもつこと）、涅槃ねはん（静寂な悟りの境地に到ること）を挙げています。そして、これらを「行わざるは、即心是仏にあらざ」と言い切っておられます。

仏法にしたがって生きるとは、無常の世界に生きていることを理解し、自己の執着を抑え、自らが仏とであるという自覚のもとに、仏としての生き方（仏道）を実践してゆくということなのです。そしてそのような実践の裏づけがあつて、はじめて「即心是仏（この心がそのまま仏である）」ということができるといえます。

これは道元禅師の書かれた、『正法眼蔵（しょうぼうげんそう）』『即心是仏』の中の一句です。元来は、『華嚴経（けごんきょう）』という經典の中にある思想ですが、中国唐代の禅者、馬祖道一（ばそどういつ）が好んで弟子の教化のために使いました。意味は、文字通り「この心そのままが仏である」ということですが、なにも心の中に常住不変の「仏」が備わっているわけではありません。道元禅師は、「即心是仏」の巻でそのような誤った解釈を強く否定しています。

では、道元禅師の説く「即心是仏」とはどのようなものなのでしょうか。

リーフレットの中にも説かれているように、なにも行わない、もしくは自分勝手な状態ではなく、日々仏道に叶った生活の実践を必ず必要とするのです。その実践とは、当に自分自身で正しい志を立て、その目標に向かって努力して行くことです。

釈迦牟尼佛

是れ

即心是佛なり

正法眼蔵

即心是佛

曹 洞 宗

神奈川県第二宗務所

第五教区 布教部・出版部